

働く幸せ 【メルマガ9月号】

7月最後の日曜日に、テレビをぼんやり見ていたら、どこかで見たことのある映像が流れ始めました。「虹色のチョーク」というタイトルが流れ、障がいのある人たちがチョークを作っています。これは川崎市にある日本理化学工業だと、気が付きました。

私は、縁があって、8年ほど前に日本理化学工業（株）の会長大山康弘さんに、お話を聞かせていただく機会がありました。日本理化学工業は、川崎区高津区の久地にある有名な企業です。それは、チョーク製造国内シェア3割を超えるトップメーカーであるということもさることながら、従業員の7割以上が知的障がい者で「日本でいちばん大切にしたい会社」として、多くの新聞・雑誌で紹介され、「カンブリア宮殿」という番組にも取り上げられていたからです。私も、当時、「働く幸せ」（WAVE出版・大山康弘著）という本を購入させていただきました。最近では、小松成美さんが「虹色のチョーク」（幻冬舎）という題名でこの会社の様子を描いています。

「働く幸せ」の中で、大山さんは「一般的に知的障がい者は、健常者に劣ると見られているかもしれませんが。しかし、私は、彼・彼女らから、人生にとって大切なことは何か、人はいかに生きるべきなのかということをお教えたのです。」と述べています。

障がい者雇用のきっかけは、熱心にお願ひに来る特別支援学校の先生の熱意と、ちょっとした同情心と、なりゆきで始まったものだったと回想しています。ところが、後に、それがとんでもない思い上がりだったことを思い知らされます。彼・彼女らが、一心不乱に作業に打ち込み、休憩のベルが鳴っても手を休めようとしない姿。上手にできたとほめたときの彼らの輝かんばかりの笑顔に、心を打たれていきます。大山さんは、その著書の中でこのように記述しています。

「人は仕事をするすることで、ほめられ、人の役に立ち、必要とされるからこそ、生きている喜びを感じることができる。家や施設で保護されるだけでは、この人間としての幸せを得ることはできない。だからこそ、彼らは、必死になって働こうとするのです。いやいや働くことが当たり前だった私にとって、この幸せは意識したことすらないものでした。それがいかにかけがいのないものか。私は生まれて初めて考えさせられました。」

今、改めて、日本理化学工業が注目されています。テレビの中では、ハローワークから日本理化学工業を紹介された非正規社員が、そこで働く障がいのある人たちからあたたかい言葉かけや気遣いを受け、今まで味わったことのなかった「人のあたたかさやかかわり」を感じたとインタビューで応えていた場面が印象に残りました。

本財団が企画している「特別支援ボランティア養成講座」には、今年も参加希望が多く、すでに定員に達しました。この講座の講師の中にも障がいのある子どもたちの就労支援の会社を運営している方もいらっしゃいます。

「人は仕事をするすることで、ほめられ、役に立ち、必要とされるから、生きている喜びを感じることが出来るのです」。この大山さんの言葉をもう一度かみしめたいと思います。

(M. Y)